149
57

禁電

司法警察官執務心得

特45
331
CZ
371
074

司法警察官執務心得目錄

第一編　總則　自第一條至第二十五條
第二編　搜査　第二十六條
第一章　搜査着手　自第二十七條至第四十二條
第二章　搜査處分　第四十三條
第一節　證憑及犯人ノ搜査　自第四十四條至第五十一條
第二節　被告事件送致　自第五十二條至第五十四條
第三編　假豫審
第一章　檢證、搜索及物件差押　自第五十五條至第六十四條
第二章　證人訊問　自第六十五條至第八十四條
第三章　鑑定　自第八十五條至第九十三條
自第九十四條至第九十八條

明治二六一〇一八

第四章　被告人逮捕　自第九十九條至第百八條
第五章　被告人訊問　自第百九條至第百二十一條

司法警察官執務心得

第一編　總則

第一條　司法警察官ハ犯罪ノ捜査ヲ爲シ現行犯罪ノ假豫審ヲ行フニ以テ其職務トス

第二條　左ニ記載シタル官吏、公吏等ハ司法警察ノ職務ヲ行フニ付キ檢事ノ指揮ヲ受ク可キモノトス

一　警視、警部長、警部

二　憲兵將校、下士

三　島司

四　郡長

五　市町村長及ヒ之ヲ置カサル地ニ於テ其職務ヲ行フ

吏員

六　林務官

七　北海道集治監ノ典獄

八　海船ノ船長

第六以下ニ記載シタル者ハ各其主管ニ關スル犯罪ニ付キ司法警察ノ職務ヲ行フ

第三乃至第五ニ記載シタル者ハ急速ヲ要スル場合ヲ除ク外成ル可ク其處分ヲ第一第二ニ記載シタル者又ハ主管ノ者ニ讓ル可シ

第三條　警視總監、府縣知事（東京府知事ヲ除ク）ハ各其管轄地内ニ於テ犯罪捜査ノ權ヲ有スト雖モ異常ノ場合ニ於テ之ヲ行フ

ヲ例トス此場合ニ於テモ成ル可ク其處分ヲ檢事ニ讓ル可シ

第四條　司法警察官ノ職務ハ晝夜ノ別ナク休暇ト雖モ之ヲ行フ可キモノトス

第五條　司法警察官ノ職務ヲ行フハ迅速ニシテ事機ヲ失ハサルコトヲ要ス

第六條　司法警察官ノ職務ヲ行フハ緻密ニシテ細大ノ事物ニ注目スルコトヲ要ス

第七條　司法警察官ノ職務ヲ行フハ能ク祕密ヲ守リ犯人逃走、罪證湮滅、人心動搖ノ弊ナカラシメ且被告人其他ノ者ノ名譽ヲ毀損スルコトナキヲ要ス

第八條　司法警察官ノ職務ヲ行フハ大事ニ嚴ニシテ小事ニ寛ナラサル可カラス

又濫ニ人ノ隱微ヲ訐クコトナキヲ要ス

第九條　司法警察官ノ職務ヲ行フハ法律ニ於テ特ニ定メタル場合ノ外强制ヲ用フルコトヲ得ス

第十條　司法警察官ハ服務時間外ト雖モ急速ヲ要スル事件アルトキハ成ル可ク其處分ヲ爲ササル可カラス

第十一條　司法警察官ハ專ラ奸惡ヲ摘發シ公害ヲ除クコトニ着眼ス可シ一概ニ犯罪ヲ檢擧スルコトノ多數ナルノミヲ以テ其職務ヲ盡スモノト爲ス可カラス

第十二條　奸惡ノ徒ハ巧ミニ法網ヲ脫スルコトヲ圖ルモノナレハ司法警察官タル者宜シク其犯情ヲ看破スルコトニ注意ス可シ

第十三條　司法警察官ハ搜査ヲ爲スニ付キ檢事ノ指揮ニ從フ可キハ勿論ナリト雖モ事毎ニ其指揮ヲ待ツ可キモノニ非ス故ニ犯罪アルニ當テハ直チニ搜査ニ着手セサル可カラス

第十四條　司法警察官、被告人又ハ被害者ト親屬若クハ故舊ナルトキハ嫌疑ヲ避クル爲メ成ル可ク其處分ヲ他ノ司法警察官ニ讓ル可シ

第十五條　司法警察官職務ヲ行フ場合ニ於テ其制服ヲ着用セサルトキハ司法警察官タルノ證票ヲ携帶ス可シ若

シ請求スル者アルトキハ之ヲ示ス可シ

第十六條　司法警察官職務ヲ行フニ際シ必要トスルトキハ警察署憲兵屯營ニ照會シテ巡査憲兵上等兵ヲ使用スルコトヲ得但事機緊急ナルトキハ直チニ之ヲ使用スルコトヲ得

第十七條　司法警察官ハ各其行政上ノ管轄區域內ニ於テ職務ヲ行フヲ例トス但假豫審處分ヲ除ク外時宜ニ依リ他ノ管轄區域內ニ於テモ之ヲ行フコトヲ得

第十八條　司法警察官搜査ヲ爲スニ付テハ犯罪ノ性質、場所及ヒ被告人ノ身分ニ付キ制限アルコトナシ

第十九條　司法警察官他ノ司法警察官ヨリ其管轄區域內

ニ於テ取扱フ可キ事件ニ付キ補助ノ求メアルトキハ之ニ應ス可シ豫審判事ノ求メニ付テモ亦同シ

第二十條　司法警察官左ニ記載シタル犯罪アルコトヲ知リタルトキハ速ニ之ヲ檢事局ニ報告ス可シ

一　刑法第二編第一章第二章及第三章第一節ノ犯罪

二　高等官、華族、有位、帶勳者ノ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ犯罪

三　外國人ノ犯罪及外國人ニ對シタル犯罪

四　重要ノ犯罪又ハ公衆ノ耳目ヲ惹ク可キ犯罪

第二十一條　陸海軍軍人、軍屬ノ犯罪ニ付テハ陸海軍治罪法及其違警罪處分例ニ從ヒ處分ス可シ但歸休兵及豫備、

後備ノ軍籍ニ在リテ召集中ニ在ラサル者竝ニ在官現役又ハ召集中罪ヲ犯シ免官免役若クハ解散ノ後發覺シタル者ハ常人ノ例ニ依ル

（參照）

陸軍治罪法

第四十二條　司法警察官現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其交付ヲ受ケタルトキハ假リニ訊問及ヒ檢證ノ處分ヲ爲シ調書ヲ作リ陸軍檢察官若クハ被告人所屬ノ長官隊長大隊區司令官監獄長衛兵司令ニ之ヲ送致ス可シ

第四十三條　豫審判事檢事司法警察官軍人ニ係ル重罪輕罪ノ告訴告發ヲ受ケタルトキハ陸軍檢察官若クハ被告人所屬ノ長官隊長大隊區司令官監獄長衛兵司令ニ之ヲ交付ス可シ

海軍治罪法

第四十二條　憲兵ノ將校下士又ハ豫審判事檢事司法警察官軍人ニ係ル重罪輕罪ノ告訴告發ヲ受ケタルトキハ其事件ヲ海軍檢察官若クハ被告人ノ所屬長ニ交付ス可シ

第四十九條　憲兵ノ將校下士又ハ司法警察官現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其交付ヲ受ケタルトキハ假リニ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲シ調書ヲ作リ海軍檢察官ニ之ヲ送致ス可シ

陸軍軍人軍屬違警罪處分例

第一條　陸軍軍人軍屬ノ犯シタル違警罪ハ違警罪即決例ニ依リ憲兵部ニ於テ其處分ヲ爲シ憲兵設置ナキ地ニ於テハ警察署ニ於テ其處分ヲ爲ス可シ

海軍軍人軍屬違警罪處分例

第一條　海軍軍人軍屬ノ犯シタル違警罪ハ違警罪即決例ニ依リ憲兵部ニ於テ其處分ヲ爲シ憲兵設置ナキ地ニ於テハ警察署ニ於テ其處分ヲ爲ス可シ

第二十二條　外國公使館ニ關スル事件ニ付テハ明治七年太政官第百二十八號達ニ從ヒ處分ス可シ

（參照）

明治七年太政官第百二十八號達

司法警察規則附錄

外國公使及公使館屬員ノ事

第一條　外國公使ハ我國憲ヲ以テ羈縻スヘカラサル通義ナレハ是ヲ擴張スル時ハ其家族並ニ公使館屬員（書記官隨員公使ノ僕隷書記官ノ家族及書記官ノ僕隷等總テ公使館ノ名籍ニアル者ヲ云フ）及ヒ其家屋車馬迄モ同樣ナリト思料スヘシ

第二條　內國人公使館又ハ公使ノ書記官ニ傭ハレ公使館ノ名籍ニ在ル間ハ公使館ノ屬隷ト見做シ若シ事故アリテ逮捕セサルヲ得サルカ或ハ呼出シテ糺問セサルヲ得サル時ハ外務省ヲ歷テ公使館ヘ報知シ其諾ヲ待チテ後引出スヘシ尤モ其者ヲ處分スルハ公使ノ關係スルコトニアラス

第三條　內國人各公使館及書記官ニ傭ハレ中ハ其公使又ハ代理ヨリ其者ノ名籍ヲ外務省ヘ屆出外務省ハ其屆書ヲ速ニ司法警察官吏ヘ送達シ置ヘシ警察官吏ハ常ニ其姓名ヲ簿記シ置ヘシ若シ途中ニテ或ル人ヲ引留其名籍ノ在ル所ヲ聞糺ス時公使館ニ傭ハレ中ト稱スル時其簿記ト校照シ愈相違ナキハ一旦公使館迄同道シ照會ヲ遂ケタル後其處分ヲ施スヘシ若其姓名簿記中ニ在ラサル者ニテモ其本人決シテ相違ナキ旨ヲ述フル時ハ公使館ヘ同道シ右ノ如ク處置ス可シ

但シ重科ニテ捕縛セサルヲ得サル者ハ第六條ニ照シテ處分スヘシ

外國公使館ノ事

第四條　外國公使館內ヘハ事故アリテ館主ヨリ請求スル時ノ外決シテ立入ルヘカラス若シ重科ヲ犯シタル罪人ト見留タル者奔逃シテ門內ヘ匿入セシ等毫髮ノ間モ猶豫スヘカラサル時ハ其把門者ニ告ケ其館主ノ許可ヲ受テ後館內又ハ邸內ヲ探索スヘシ

第五條　右公使館書記官ノ住宅内ニ在ル内外屬員ハ勿論馬車家畜ノ末ニ至ル迄一切手ヲ觸ルヘカラス若シ職務上止ムヲ得ス手ヲ降スヘキ事故アラハ是ヲ外務省ニ打合セ而シテ其處分ヲ爲ス可シ

第六條　外國公使屬員罪ヲ犯シ並犯罪ノ内國人公使館ニ住居スル時ノ事外國公使館ノ屬員ナル外國人殺傷或ハ剽盜放火强姦等目前ニ顯ハレタル罪ヲ公使館外ニテ現ニ行フヲ見及フカ或ハ現ニ見スト雖モ衆人ヨリ報告シ確證アリテ片時モ猶豫ナシカタキ時ハ其人ヲ其場ニ引留置即刻公使館ヘ報知ノ上同館ヘ引渡シ又外務省ヘ報知シ是ヲ公使館ニ引渡セシ手續ヲ申ヘシ決シテ手鎖捕縛等ノ事アル可カラス或ハ屬員ノ内國人ハ引留置即刻公使館ヘ報知シ改メテ彼ヨリ引渡テ受クルノ手順ヲ施シ又コレヲ外務省ニ申ヘシ

第七條　犯罪ノ風聞アルカ或ハ他人ノ白狀ヨリ明了ニ其罪科ノ知レタル内國人現ニ公使館内ニ傭ハレテ公使館ニ住居スルトキハ其館外周圍ノ各路ヲ遮斷シ而後外務省ヘ報知シ同館ヘ照會ヲ乞館主ニ引渡ヲ要求シ其人ヲ受取リテ後ヲ之レヲ捕縛ス可シ若シ館主之ヲ拒ムトキハ其旨ヲ猶外務省ヘ報知シテ其處分ヲ定ムヘシ

第二十三條　本邦ノ裁判權ニ屬セサル外國人ノ身體、家宅、物件ニ關スル處分ニ付テハ本則ヲ適用ス可カラス

第二十四條　司法警察官ノ作ル可キ書類ニハ所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日、場所ヲ記載シテ署名捺印シ每葉ニ契印ス可シ若シ官署、公署ノ印ヲ用フルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ

又書類ヲ作ルニハ文字ヲ改竄ス可カラス若シ挿入、削除及ヒ欄外ノ記入ヲ爲ストキハ之ニ認印シ其字數ヲ記載ス可シ但削除ノ部分ハ讀ミ得可キ爲メ其字体ヲ存ス可

シ

凡テ書類ハ文飾ヲ用ヒス簡明平易ニシテ事實ヲ失ハサルコトヲ要ス

第二十五條　被告人、證人其他ノ者ノ署名捺印ヲ要スル書類ハ之ヲ本人ニ讀聞カセ署名捺印セシム可シ若シ本人署名捺印スルコト能ハサルトキ又ハ氏名ヲ代書シ本人ヲシテ拇印若クハ捺印セシメタルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第二編　捜査

第二十六條　捜査ハ犯罪ノ證憑及ヒ犯人ヲ檢擧シ公訴ノ提起及ヒ實行ノ資料ヲ得ルヲ以テ目的トス

第一章　捜査着手

第二十七條　捜査ハ現行犯、告訴、告發、自首、新聞、風説其他見聞シタル事物ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル場合ニ於テ着手ス可キモノトス

第二十八條　告訴、告發ノアリタル場合ニ於テ告訴ヲ告發ト稱シ告發ヲ告訴ト稱シ其他何等ノ名稱ヲ以テスルモ之ヲ受ケ宜シク實ニ從テ處分ス可シ

第二十九條　告訴、告發ハ却下ス可キモノニ非ス其捜査ニ着手ス可キ事件ナルト否トニ拘ハラス之ヲ受ケ相當ノ手續ヲ爲ス可シ

第三十條　書面ヲ以テ告訴、告發ヲ爲シタル場合ニ於テ其旨趣不明瞭ナルカ又ハ本人ノ意思ニ適合セサル可シト

思料スルトキハ其取調ヲ爲シ調書ヲ作ル可シ

第三十一條　口述ヲ以テ告訴、告發ヲ爲シタルトキハ隨意ニ其事件ヲ陳述セシメ調書ヲ作ル可シ

第三十二條　告訴、告發ニ付キ增減變更ノ申立アリタルトキハ本人ヲシテ書面ヲ差出サシメ又ハ其調書ヲ作ル可シ

第三十三條　告訴、告發ヲ受クルトキハ成ル可ク犯罪ノ性質、方法、日時、場所、被告人、證人ノ住所、氏名其他證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キコトヲ申立テシメ調書ヲ作ル可シ

第三十四條　被告人ヲ指名シテ告訴、告發ヲ爲シタルトキハ本人ト被告人トノ關係如何ヲ察シ其誣罔ニ出ツルナキヤ否ニ注意ス可シ又告訴人ノ如キハ一時ノ忿怒ニ因リ過實ノ申立ヲ爲スコトナキヤヲ保シ難キヲ以テ成ル可ク失誤ナキコトニ注意セシム可シ

第三十五條　告訴人、告發人ニ於テ犯罪ヲ申告シタルカ爲メ後難ヲ畏ルル模樣アルトキハ其氏名ヲ顯ササルコトニ注意ス可シ

第三十六條　代人ノ告訴、告發ニ係ルトキハ委任狀ヲ差出サシム可シ但法律上代理人告訴ヲ爲ストキハ此限ニアラス

第三十七條　告訴、告發ノ取下アルモ其書面ハ返附スルモノニ非ス更ニ本人又ハ代人ノ署名捺印シタル取下申立書ヲ差出サシム可シ

口述ヲ以テ取下ヲ爲ストキハ其申立ニ付キ調書ヲ作ル可シ

第三十八條　官吏、公吏職務上ノ告發ハ檢事ニ爲ス可キモノナリト雖モ急速ヲ要スル事件ニ付キ一面司法警察官ニ報告アリタル場合ニ於テハ司法警察官ハ通常ノ手續ニ從ヒ搜査ニ着手ス可シ

第三十九條　犯罪ヲ自首スル者アリタルトキハ其陳述ヲ錄取ス可シ

第四十條　自首ハ悔悟又ハ減刑ノ企望ニ出ツルモノ多シト雖モ或ハ他人ノ罪ヲ免レシムル爲メ自ラ誣ヒ或ハ重キ罪ヲ避クルノ意ヲ以テ輕キ罪ヲ首出スル等ノ事ナシトセス宜シク其虛實及ヒ盡不盡ニ注意ス可シ

第四十一條　新聞紙上犯罪事件ヲ記載シ又ハ犯罪アリタルノ風說アルトキハ其出所、原因等ヲ取調ヘ其虛實ニ注意ス可シ

第四十二條　變死、創傷者アリタルトキ又ハ隱匿、埋藏物等ヲ發見シタルトキハ其犯罪ニ原因シタルヤ否ニ注意ス可シ

第二章　搜查處分

第四十三條　搜查處分ハ犯罪ノ原由、性質、方法、情狀、日時、場所、被害ノ形狀、多寡、被告人ノ氏名、年齡、職業、出生ノ地、住所、本籍、身分、品行、前科ノ有無及ヒ證人ノ誰タルコト其他證憑ト爲ル可キ一切ノ事物ヲ取調フルニ在リ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模樣ニ注意ス可シ

第一節　證憑及ヒ犯人ノ捜査

第四十四條　犯罪ノ場所又ハ證憑物件所在ノ場所ニ就キ捜査ヲ必要トスル場合ニ於テハ其處分ヲ爲スコトヲ得但家屋、建造物又ハ船舶ニ係ルトキハ其戸主又ハ管守者ノ承諾ヲ得ルヲ要ス

前項ノ場合ニ於テハ其實況ヲ錄取ス可シ

第四十五條　犯罪ノ事實ヲ證明ス可キ物件ハ所有者又ハ保管者ノ承諾ヲ得テ之ヲ領置シ又ハ保全セシムルコトヲ得

領置シタル物件ハ其品目ヲ記載シ且目錄ヲ作リ所有者

又ハ保管者ニ渡ス可シ

第四十六條　前二條ノ處分官署公署ニ係ルトキハ其署ノ長又ハ之ニ代ハル可キ者ノ許諾ヲ得ルヲ要ス

第四十七條　捜査上必要トスルトキハ犯罪ノ事實ヲ知ル可シト思料スル者又ハ被告人ヲ呼出シ若クハ其所在ニ就キ陳述ヲ聽クコトヲ得但呼出ヲ爲スニハ書面又ハ口頭ヲ以テ報知ス可シ

又其承諾ヲ得テ犯所其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得

第四十八條　前條ノ場合ニ於テ被告人其他ノ者ノ陳述ハ之ヲ錄取ス可シ

事實單簡ナルカ又ハ本人ノ希望アルトキハ書面ヲ差出

サシムルモ妨ケナシ

第四十九條　捜査上鑑定ヲ必要トスルトキハ之ヲ爲サシムルコトヲ得其結果ハ鑑定書ニ記載シ之ヲ差出サシム可シ

第九十六條ノ手續ハ本條ニモ亦之ヲ準用ス可シ

第五十條　物件ノ原形ヲ變スルニ非サレハ鑑定ヲ爲スコト能ハサル場合ニ於テハ鑑定ヲ爲サシム可カラス但腐敗其他ノ原由ニ因リ其物件ヲ保存ス可カラサルトキハ此限ニ在ラス

第五十一條　鑑定ノ爲メ死屍ノ解剖ヲ必要トスルトキハ檢事ノ許可ヲ受ク可シ其解剖ハ必要ナル部分ノ外之ヲ爲サシム可カラス

（參照）

明治十年第二十二號布告變死ニ係ル屍ヲ醫察官吏檢査スル時ニ於テ解剖ヲ行ハサレハ其致命ノ原由ヲ確知シ難キ旨醫師申立ル時ハ檢事（派出ナキ地方ハ其地方長官）ノ許可ヲ受ケ其部分ヲ解剖檢査セシムルコトヲ得

第二節　被告事件送致

第五十二條　被告事件ノ要領ヲ得タルトキハ送致ノ手續ヲ爲ス可シ但送致後ト雖モ必要ナルトキハ仍ホ捜査ヲ爲ス可シ

被告事件ヲ送致スルトキハ證憑物件及ヒ意見書ヲ添ヘ且參考ト爲ル可キ事項ヲ報告ス可シ

第五十三條　重罪、輕罪ノ捜査ヲ爲シタルトキハ速ニ其事

件ヲ管轄裁判所檢事局ニ送致シ違警罪ニ付テハ即決ヲ爲ス可キ官署ニ送致ス可シ

第五十四條　本邦ノ裁判權ニ屬セサル外國人ノ犯罪ニ付テハ搜査ヲ爲シタル者ヨリ其事件ヲ其地ノ地方裁判所ノ檢事局ニ送致ス可シ但急速ヲ要スルトキハ直チニ管轄領事廳所在地ノ地方裁判所ノ檢事局ニ送致スルコトヲ得此場合ニ於テハ速ニ其地ノ地方裁判所ノ檢事局ニ其旨ヲ報告ス可シ

第三編　假豫審

第五十五條　司法警察官重罪、輕罪ノ現行犯、准現行犯ニ付キ刑事訴訟法第百四十七條ノ處分ヲ爲スヲ假豫審トス

第五十六條　現行犯ニ付テハ被告人ヲ逮捕シタルト否トヲ問ハス假豫審處分ヲ爲スコトヲ得

第五十七條　准現行犯ニ付テハ成ル可ク被告人ヲ逮捕シタル後假豫審處分ヲ爲ス可シ但數人共犯ノ場合ニ於テハ他ノ正犯、從犯未タ捕ニ就カスト雖モ假豫審處分ヲ爲スコトヲ得

家宅內ノ犯罪ニ付キ戶主又ハ戶主ニ代ハル可キ者ノ請求ニ因リ檢證處分ヲ爲シタルトキハ被告人ヲ逮捕セスト雖モ其他ノ假豫審處分ヲ爲スコトヲ得

第五十八條　假豫審ニ着手シタル事件ト雖モ一タヒ其手續ヲ止メタルトキハ復タ假豫審處分ヲ爲スコトヲ得ス

第五十九條　假豫審ニ着手シタル場合ニ於テ豫審判事又ハ檢事其處分ヲ爲サントスルトキハ速ニ之ヲ讓ル可シ

第六十條　假豫審ニ於テハ犯罪ノ性質、方法、日時、場所其他犯罪ニ關スル證憑ニ付キ取調ヲ爲スノミナラス被告人ノ利益ト爲ル可キ模樣ニ付テモ亦其取調ヲ爲ス可シ

第六十一條　假豫審ニ關スル書類ハ司法警察官自ラ之ヲ作ル可シ但時宜ニ因リ巡査、憲兵上等兵等ヲシテ筆記セシムルハ妨ケナシ

第六十二條　假豫審處分ヲ了シタルトキハ第五十二條以下ニ從ヒ被告事件送致ノ手續ヲ爲ス可シ

第六十三條　假豫審ニ着手シタル後其取調ヲ繼續ス可キモノニ非スト思料スルトキハ速ニ其手續ヲ止メ被告人ヲ逮捕シタル場合ニ於テハ直チニ之ヲ放免シ其旨ヲ檢事局ニ通知ス可シ

第六十四條　罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付テハ刑事訴訟法第五十八條ノ處分ヲ除ク外現行犯ノ場合ト雖モ搜査處分ニ止ム可シ

第一章　檢證、搜索及物件差押

第六十五條　假豫審ニ付キ事實發見ノ爲メ必要トスルトキハ犯所若クハ其他ノ場所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

第六十六條　假豫審ニ付テハ被告人又ハ其他ノ者ノ住居ニ臨檢シ搜索及ヒ物件差押ヲ爲スコトヲ得

被告人又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ所持スルノ疑アル者ノ身體及ヒ之ニ屬スル物件ニ就キ捜索ヲ爲スコトヲ得

第六十七條　前條ノ處分ヲ爲スニハ戸主又ハ本人ノ承諾ヲ待ツニ及ハスト雖モ成ル可ク處分前其旨ヲ告知シ且公力ヲ用フルコトナキヲ要ス

第六十八條　事實ヲ證明ス可キ物件ヲ所持スト雖モ藏匿ノ情ナキ者ハ成ル可ク住居、身體又ハ物件ニ就キ捜索ヲ爲サス本人ニ通知シテ其物件ヲ差出サシム可シ

第六十九條　被告人ニ非サル者ノ住居、身體又ハ物件ヲ捜索スルハ物件藏匿ノ疑アル場合ニ限ル可シ

第七十條　住居内ノ檢證、捜索、物件差押ニ付テハ戸主又ハ同居ノ親屬ノ立會アルヲ要ス若シ其在ラサルカ又ハ白痴、瘋癲、幼年者ナルトキハ市町村長又ハ其在ラサル地ニ於テハ市町村長ノ職務ヲ行フ吏員ヲシテ立會ハシム可シ

第七十一條　官署、公署ニ於テ檢證、捜索、物件差押ヲ爲ストキハ其署ノ長又ハ之ニ代ハル可キ者ノ立會アルコトヲ要ス

第七十二條　檢證、捜索ノ場所ニ於テ發見シタル物件ニシテ其出所、性質、形狀、用方等ニ因リ被告人ノ人違ナキコト又ハ犯罪ノ模樣ヲ知ルニ足ル可シト思料シタルトキハ之ヲ差押フ可シ

官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者ノ所持スル物件ニシテ其職務上默祕ス可キ義務アル事情ニ關スルモノハ其承諾アルニ非サレハ差押ヲ爲スコトヲ得ス

醫師、藥商、穩婆、辯護士、辯護人、公證人、神職、僧侶其身分、職業ノ爲メ委託ヲ受ケタル物件ニシテ默祕ス可キ義務アル事情ニ關スルモノニ付テモ亦同シ

第七十三條　檢證、搜索、物件差押ヲ爲ス場合ニ於テ必要トスルトキハ其場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽キ又ハ鑑定人ヲシテ鑑定ヲ爲サシムルコトヲ得

第七十四條　住居內ノ檢證、搜索、物件差押ハ日出前、日沒後之ヲ爲スコトヲ得ス但急速ヲ要スル場合ニ於テ戶主ノ承諾アリタルトキハ何時ニテモ檢證、搜索ヲ爲スコトヲ得

第七十五條　旅店、割烹店其他夜間ト雖モ衆人ノ出入スル場所ニ於テハ其公開時間內ニ限リ何時ニテモ檢證、搜索、物件差押ヲ爲スコトヲ得

第七十六條　住居內ニ於テ現ニ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ罪ヲ犯ス者アリテ急速ノ處分ヲ要スルトキハ何時ニテモ其現場ニ限リ檢證、搜索、物件差押ヲ爲スコトヲ得

第七十七條　住居內ノ檢證、搜索、物件差押ヲ爲スニハ成ル可ク穩當ノ方法ヲ用ヒ濫ニ門戶、牆壁、器具等ヲ損壞スルコトナキヲ要ス

又其處分ヲ終リタルトキハ書類、物件ノ紛失、毀損ヲ防ク爲メ相當ノ處置ヲ爲ス可シ

第七十八條　檢證、搜索、物件差押中雜沓、喧噪其他妨害ヲ爲ス者アルトキハ之ヲ制止ス可シ又何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルコトヲ禁スルヲ得若シ其禁ヲ犯ス者アルトキハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ留置スルコトヲ得

第七十九條　檢證、搜索、物件差押ハ其處分ヲ終ルマテ停止セサルヲ要ス若シ已ムコトヲ得サル事故アリテ之ヲ停止スルトキハ證憑湮滅ヲ豫防スル爲メ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クコトヲ得

第八十條　住居搜索ヲ爲スニハ其目的トスル所ノ書類、物件ヲ藏匿スルコトヲ得ヘシト思料スル場所ニ限ル可シ

第八十一條　檢證、搜索、物件差押ヲ爲シタルトキハ其調書ヲ作ル可シ

差押ヘタル物件ハ其品目ヲ調書ニ記載シ又ハ別ニ目錄ヲ作リ立會人又ハ所有者ニ其拔書又ハ謄本ヲ渡ス可シ

第八十二條　差押ヘタル物件ハ散佚、毀損ヲ防ク爲メ認印若クハ封印ヲ爲シ且其差押ヘヲ爲シタル年月日及ヒ件名ヲ記シ其物件ニ添付ス可シ

又運搬シ難キ物件ニ係ルトキハ看守者ヲ附スル等便宜ノ處置ヲ爲ス可シ

第八十三條　事實發見ノ爲メ必要トスルトキハ郵便、電信、鐵道ノ官署、諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ關係人ヨリ發シ若クハ此等ノ者ニ對シ發シタル書類、電報其他ノ物件ヲ受取ルコトヲ得但書類、電報ハ檢事ノ許可ヲ得ルニ非サレハ開披ス可カラス

書類、電報、物件ヲ受取タルトキハ其證書ヲ渡ス可シ

第八十四條　差押ヘタル物件ト雖モ檢事局ニ送致スルニ及ハサルモノト認ムルトキハ所有者又ハ保管者ニ保全ヲ命シ其受書ヲ差出サシム可シ

第二章　證人訊問

第八十五條　假豫審ニ付キ事實發見ノ爲メ必要トスルトキハ證人ヲ呼出シ又ハ其所在ニ就キ訊問ヲ爲スコトヲ得

證人檢證、搜索ノ場所ニ在ルトキハ直チニ訊問ヲ爲スコトヲ得

第八十六條　證人ニハ先ツ其氏名、年齡、身分、職業、住所及ヒ被告人又ハ被害者トノ關係如何ヲ訊問ス可シ但宣誓ヲ爲サシム可カラス

第八十七條　證人ヲ訊問スルニハ成ル可ク解シ易キ言語ヲ用ヒ濫ニ法律ノ成語等ヲ用フ可カラス

第八十八條　證人ニハ自由ニ陳述セシム可シ其陳述ニ對シ辯駁、討論ヲ爲ス可カラス若シ其陳述他岐ニ涉ルトキ

ハ之ヲ止メ齟齬アルトキハ之ヲ質ス可シ

第八十九條　證人ハ愛憎、畏懼ノ心ヲ生シ或ハ他ノ陳述ニ雷同スルノ恐アルヲ以テ成ル可ク被告人又ハ他ノ證人ト各別ニ訊問ス可シ但對質ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

第九十條　證人ヲシテ證據物件ニ付キ證明セシムルコトヲ要スルトキハ成ル可ク其物件ヲ示ス可シ

第九十一條　證人ヲシテ犯所若クハ其他ノ場所ニ就キ證明セシムルコトヲ要スルトキハ其場所ニ同行スルコトヲ得

第九十二條　證人聾ナルトキハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナルトキハ書面ヲ以テ答ヘシム可シ

聾者、啞者文字ヲ知ラサルトキハ通事ヲ命ス可シ國語ニ通セサル者ニ付テモ亦同シ

第九十三條　證人ノ陳述ニ付テハ訊問ノ順序ヲ逐ヒ即時ニ其調書ヲ作ル可シ

證人其陳述ヲ變更、增減センコトヲ申立タルトキハ更ニ其陳述ヲ聞キ調書ヲ作ル可シ

第三章　鑑定

第九十四條　假豫審ニ付キ犯罪ノ性質、方法等ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定ヲ必要トスルトキハ醫師、穩婆、化學者其他學術、職業ニ因リ適當ノ識能ヲ有スル者ヲシテ鑑定ヲ爲サシムルコトヲ得

第九十五條　第五十條第五十一條ノ規定ハ本章ニモ亦之ヲ適用ス

第九十六條　鑑定ハ鑑定人ノ自由ニ任セ其方法ニ付テハ干渉ス可カラスト雖モ成ル可ク現場ニ立會ヒ其結果ヲ得ルコトニ注意ス可シ

第九十七條　鑑定ノ手續、時間及ヒ其結果ハ鑑定人ナシテ鑑定書ニ記載セシメ其結果分明ナラサルトキハ其推測スル所ヲ記載セシム可シ

數名ノ鑑定人ヲ命シタル場合ニ於テ各意見ヲ異ニスルトキハ各自ニ鑑定書ヲ作ラシメ又ハ一個ノ鑑定書ニ其意見ヲ記載セシム可シ

鑑定書ニハ鑑定セシ年月日ヲ記載シ署名捺印シ毎葉ニ契印セシム可シ

第九十八條　鑑定書ニ不明、不備ノ點アルトキハ更ニ其說明書ヲ作ラシメ鑑定書ニ添置ク可シ

第四章　被告人逮捕

第九十九條　禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ現行犯、准現行犯ニシテ被告人現場ニ在ルトキハ直チニ之ヲ逮捕ス可シ但被告人ノ身分又ハ事件ノ模樣ニ因リ其逮捕ヲ必要トセサルトキハ此限ニアラス

第百條　現行犯、准現行犯ニ付キ被告人ヲ追跡スル場合ニ於テハ其追及シタル場所ノ如何ニ拘ハラス直チニ之ヲ

逮捕スルコトヲ得但日出前日沒後ハ戸主又ハ之ニ代ハル可キ者ノ承諾アルニ非サレハ他人ノ家宅内ニ進入ス可カラス

第百一條　被告人ヲ逮捕スルニハ成ル可ク穩當ノ方法ヲ用フ可シ

被告人兇器ヲ持シ抗拒スル場合ニ於テ已ムコトヲ得ス劍銃等ヲ用フルモ決シテ自衛ノ區域ヲ踰ユ可カラス

第百二條　假豫審ノ場合ニ於テハ現場ニ在ラサル被告人ニ對シ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

被告人他ノ管轄地内ニ在ルトキハ其地ノ司法警察官ニ勾引狀ヲ送致シ其執行ヲ囑託ス可シ

若シ其事件急速ヲ要スルトキハ巡査憲兵上等兵ヲシテ勾引狀ヲ帶行セシメ又ハ電報ヲ以テ逮捕ノ處分ヲ囑託スルコトヲ得其囑託ヲ受ケタル司法警察官ハ其名ヲ以テ勾引狀ヲ發ス可シ

第百三條　勾引狀ノ執行ヲ受ケタル被告人ハ護送途中及ヒ引致シタル時ヨリ四十八時間内ハ留置場ニ入レ置クコトヲ得

第百四條　勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ釋放ノ場合ヲ除ク外前條ノ期限内ニ檢事局ニ送致スルノ手續ヲ爲ス可シ

勾引狀ナクシテ被告人ヲ逮捕シタル場合ニ於テモ亦同

シ

第百五條　常人ニ於テ現行犯、准現行犯ノ被告人ヲ逮捕シ之ヲ引渡サントスルトキハ成ル可ク其便宜ヲ計リ速ニ之ヲ受取ル可シ

第百六條　現行犯、准現行犯ニ付キ巡査、憲兵上等兵又ハ常人ヨリ被告人ヲ受取リタルトキハ逮捕ノ事由及ヒ申告ノ趣旨ニ付キ調書ヲ作ル可シ

逮捕ヲ爲シタル者ヨリ手續書ヲ差出シタルトキハ其相違ナキヤ否ヤヲ取調ヘ之ヲ調書ニ添置ク可シ

第百七條　勾引狀ニハ被告事件、被告人ノ氏名、職業、住所及ヒ年月日時ヲ記載ス可シ其氏名分明ナラサルトキハ容貌、體格等ヲ明示ス可シ

第百八條　勾引狀ハ巡査、憲兵上等兵ヲシテ之ヲ執行セシム可シ

第五章　被告人訊問

第百九條　假豫審ニ於テハ取證ノ機ヲ失セス且被告人ノ利益ヲ損セサル爲メ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證、搜索、物件差押及證人訊問ニ付キ急速ヲ要スル場合ハ此限ニ在ラス

第百十條　被告人ニハ先ツ左ノ事項ヲ訊問ス可シ

一　氏名、年齡、身分、職業、住所、出生ノ地

二　有位又ハ帶勳者ナルヤ否

三　前科ノ有無若シ前科アルトキハ其罪名刑名裁判言渡ヲ爲シタル廳名及ヒ其年月日

第百十一條　被告人ヲ訊問スルニハ穩和ヲ旨トシ且其年齡身分性質等ヲ斟酌シ一樣ノ訊問ヲ爲ス可カラス

第百十二條　訊問ヲ爲スニハ平易ノ語ヲ用ヒ濫ニ法律ノ成語等ヲ用フ可カラス又簡明ヲ旨トシ勉メテ疑似ニ涉ルコトヲ避ク可シ

第百十三條　被告人ニハ自由ニ發言セシム可シト雖モ餘事ニ涉ラシメサルコトニ注意ス可シ

第百十四條　訊問ハ一事項毎ニ其端ヲ更メ成ル可ク同時ニ數事項ヲ訊問ス可カラス

數罪俱發ノ場合ニ於テハ成ル可ク一罪ノ訊問ヲ終リタル後他罪ニ及フ可シ

第百十五條　數人共犯ノ場合ニ於テハ成ル可ク各別ニ訊問シ其通謀ヲ防ク可シ且輙ク事實ヲ得可シト思料スル者ヨリ訊問ヲ爲ス可シ

第百十六條　證憑物件ハ時機ヲ計リ之ヲ被告人ニ示シ其辯解ヲ爲サシム可シ

第百十七條　事實發見ノ爲メ必要ナル場合ニアラサレハ被告人ヲシテ他ノ被告人又ハ證人ト對質セシム可カラス

第百十八條　第九十二條ハ被告人訊問ニ付テモ亦之ヲ適

用ス可シ

第百十九條　被告人ノ擧動ハ事實發見ノ端緒トナルコトアルニ因リ其言語、氣色等ニ注意ス可シ

第百二十條　被告人ノ白狀アリト雖モ一概ニ眞實ト做ス可カラス其白狀ニ適應スル證據ノ有無ヲ取調フルコトニ注意ス可シ

第百二十一條　訊問ニ付テハ即時ニ其調書ヲ作リ問答ノ始末及ヒ被告人ノ擧動等遺漏ナク記載ス可シ

第九十三條ノ手續ハ被告人訊問調書ニ付テモ亦之ヲ適用ス可シ

明治廿六年十月十二日飜刻印刷
明治廿六年十月十五日發行
（定價金參錢）

發行兼印刷者　神田區錦町三丁目八番地　八尾新助

發賣所　神田區表神保町一番地　八尾書店

7
5
74

司法警察官執務心得

禁電

49
57

033479-000-3

CZ-351-074

司法警察官執務心得

八尾 新助／刊

M26

BBK-0275